
スピン・オフ小説 あんたはすごい！

水本爽涼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スピン・オフ小説 あんたはすごい！

【Nコード】

N3088X

【作者名】

水本爽涼

【あらすじ】

時間研究所に登場した塩山満のスピン・オフ小説。

第23回

「やっぱり、何かあのかしら？」

早希ちゃんは少し怖くなったのか、酒棚に置かれた水晶玉を窺い見て、小声で云った。

「なに云ってんの！ ほほほ…、馬鹿な子ねえ。そんなこと、ある訳ないでしょ」

ママは態と強がってみせ、小さく笑う。私はボックスから立ち上がると、カウンター席へ移動した。後ろに二人が従う。

「少し寝不足気味のせいだと思います」

「そう？ なら、いいんだけど…。いつものでいい？」

「はい…」

ママはカウンターの酒棚側へ入ると氷を準備する。キープしたボトルは二本ある。早希ちゃんはその一本を棚から下ろし、ママに手渡す。慣れたママの手つきでダブルの水割りが仕上がっていく。今日のつまみは、ピーナツだ。早希ちゃんは、それが乗った小皿を私の前へ置く。

「えーと、どこまで話したっけ？」

「棚から動かしちゃ幸運が逃げるって云ったところじゃなかったですか？」

早希ちゃんがママをフォローする。

「そうそう…。まあ、そんなことはない、とは思っただけど、そう云われちゃねえ。なんにもさあ、置かなきゃなんない訳なんて、これっぽっちもないのよ。見返りを要求されたのでもないからね」

「それで置いた、ってどこですか？」

「ええ…。だって、断ってさあ、妙なことが起きれば嫌じゃない？」

「はあ、それはまあ…」

私は頷いて、ピーナツをひとつ齧った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3088x/>

スピン・オフ小説 あんたはすごい！

2011年12月13日01時01分発行